

初級編

「加賀ふるさと検定」受験生のためのテキスト

ちり しぜんへん
地理・自然編

がいきょう
概況

加賀市は、石川県の最西南端に位置し、南西方は福井県、東方は小松市に接し、北西に走る海岸線は日本海に面しています。加賀市の周囲は、98.5kmで、このうち16.5kmが日本海と接する海岸線となっています。市の面積は、306 k m²で、このうち、田・畑の農地が約35.3 k m²、山林が211.8 k m²を占めています。

人口は平成25年9月現在で、約71,500人となっており、産業人口構成(平成22年度:国勢調査)では、1次産業は3.1%、2次産業は、35.0%、3次産業は61.9%となっています。特に、農業・林業・漁業などに従事する1次産業人口は、この10年間で280人前後が減少しています。

加賀市から日本三名山のひとつ、霊峰白山を仰ぎ、その西方に眼をうつすと加賀・江沼の人々が、古来より親しんできた1,369mの大日山、942mの富士写ヶ岳、478mの鞍掛山(舟見山)のいわゆる「江沼三山」があります。

また、当市の2大河川、大聖寺川と動橋川は、いずれも大日山を源流として、豊かな江沼平野をうるおし、それぞれ日本海と柴山潟に注いでいます。

市の海岸部は、越前加賀海岸国定公園に指定されており、尼御前岬や加佐ノ岬、鹿島の森などの景勝地をはじめ、柴山潟や、ラムサール条約登録湿地の片野鴨池など、豊富な自然資源を数多く有しています。また、北前船で栄えた橋立、塩屋、瀬越の3町は、江戸時代から明治時代にかけて、多くの船主や船頭を輩出しました。特に、橋立町は、往時の船主邸や高く積まれた石垣などにその面影を見ることができ、赤瓦の船主集落として、国の重要伝統的建造物群に指定されています。

一方、山間部は、山中・大日山県立自然公園に指定されており、東谷地区や西谷地区などの山村集落においては、昔ながらの古民家や土蔵などが残っています。とりわけ、炭焼きを主産業とした大土、今立、杉の水、荒谷の4集落は、

山村農家の特徴を^{とくちょう}発展させた古民家が今も多く残り、^{いしづ}周辺の石積みや石造物、^{じゅもく}樹木、^{すいろ}水路などと一体となって独特な歴史的風致^{ふうち}を形成^{けいせい}しており、国の重要伝統的建造物群指定地区となっています。

植生環境と動物

加賀市の海岸部^{きゅうりょうぶ}や内陸の丘陵部^{いき}はヤブツバキクラス域に、また、山地は概ねブナクラス域^{せく}に属^{ぞく}しており、低地^{こうざん}から高山に至るまで多様な植物群落^{しよくぶつぐんらく}を形成しています。^{じょうりよくこうようじゅりんたい}常緑広葉樹林帯に大半が属する市域の海岸から低地には、現在も鹿島の森^{かしま}をはじめ橋立町の出水神社^{いすみ}や大聖寺の錦城山^{きんじょうざん}等の常緑広葉樹^{じょうりよくこうようじゅ}の自然林^{ぜんりん}が各地で見られ、タブノキ林やスダジイ林等の樹林^{せんざいしぜんしよくせい}は地域の潜在自然植生を伝える貴重な植生^{きちょう}となっています。

塩屋海岸^{しおやかいがん}や片野海岸^{かたの}にはコウボウムギ、ハマボウフウ、イソスミレ、ハマゴウ^{あまごぜん}等からなる砂丘植生^{さきゅうしよくせい}が広範囲^{こうはんい}に分布^{ぶんぷ}しています。片野から黒崎海岸^{あまごぜん}、尼御前^{あまごぜん}岬^{みさき}に続く海岸には、ノハナショウブ、ミソハギ等^{こんせい}が混生^{こんせい}したススキ草原^{そうげん}等が分布^{ぶんぷ}しています。片野から塩屋海岸にかけて広がるクロマツ植林^{ぶんぷ}は、我が国の海岸砂防林形成史上^{さぼうりん}の記念碑的存在^{きねんひてき}でもあります。

海岸沿いの丘陵地^{きゅうりょうち}は、コナラ林、アカマツ林、クロマツ林、モウソウチク林等の二次林^{にじりん}や人工林^{じんこうりん}が広い面積を占め、アカマツ・クロマツ林はマツノザイセンチュウ^{まつが}による松枯れ^{りんそ}が進行^{へんか}しており、林相^{りんそう}が大きく変化^{へんか}しています。

山間部のスギ植林^{しよくりん}は谷筋^{たにすじ}に広く分布^{ぶんぷ}しています。ブナクラス域^{ふく}に含まれるおおよそ海拔400～500m以上の山地^{かいぼつ}やその周辺の集落^{ゆうせん}ではミズナラが優占する二次林^{かいぼつ}が形成され、大日山^{つら}に連なる山々^{つら}では、ブナが優占する自然林^{ゆうせん}が形成されています。

動物相^{どうぶつそう}では、豊かな森林環境^{せいそくち}に生息地とするツキノワグマ、ニホンカモシカ等の大型哺乳類^{ほにゅうるい}をはじめとした動物群^{せいそく}が生息^{せいそく}しています。片野鴨池^{かちいけ}や柴山瀧^{しばやまがた}をはじめとする池沼^{ちしやう}は、ガン・カモ類^{みすどり}やコハクチョウ^{ひらいち}等の多くの水鳥^{みすどり}の飛来地^{ひらいち}として重要^{じゅうよう}であるとともに、ハッチョウトンボ^{しつちかんきやう}に代表される良好な湿地環境^{しつちかんきやう}も現存^{げんぜん}しています。

交通網

加賀市は、大聖寺、山代、片山津、動橋、作見のほか、山中（温泉・河南）、橋立^{しがいち}といった市街地^{ぶんさん}が分散^{たきよくぶんさんがた}する多極分散型^{けいせい}の都市^{けいせい}を形成^{けいせい}しています。また、国

道8号沿道には、商業施設が連立しています。さらに、JR北陸本線が国道8号と平行して通過しており、3つの駅が設置されています。すなわち、市役所が所在する大聖寺にJR大聖寺駅、市の中央部、作見には加賀温泉郷の玄関口となっているJR加賀温泉駅、また、古くから宿場町として栄えた動橋にはJR動橋駅が設けられています。

海沿いには北陸自動車道が走っており、加賀ICと片山津ICが設置されています。また、市内を縦に国道8号線が通り、この8号線に接続して、黒瀬町から大聖寺、福井県あわら市を結ぶ国道305号線と、黒瀬町から山中温泉を通過して福井県丸岡町に抜ける国道364号が延びています。これらの国道を中心に、（主要地方道）山中伊切線、（同）小松山中線、（同）小松加賀線などの県道を加えた幹線道路によって、加賀市の基本的な道路網が整備されています。

産業

市の産業は、機械製造や土産菓子製造、山中、山代、片山津の3温泉を中心とした観光業が中心です。

特に、加賀市の基幹産業であります機械製造業は、山中漆器における轆轤技術を応用した木製リムやスポークなどの自転車部品製造を始めた「新家工業」が起源となり、現在の「大同工業」へと受け継がれてきました。市内の江沼チエーン製作所、月星製作所、東野産業なども、いずれも自動車やバイク部品やベアリングなどの製造で全国的に活躍する企業であり、まさに当市の経済、雇用を支える一大産業となっています。

一方、江戸時代からの伝統産業として、山中漆器と九谷焼があります。

山中漆器は、天正年間（1570～92）に、大聖寺川の上流部の真砂に、轆轤（ろくろ）の技術を使用して椀や盆をつくる技術を持った木地師が良材を求めて移住してきたことから始まったと言われています。江戸時代の元禄年間には、湯治客にに応じて、椀や盆、茶托などをつくり販売するなど、山中温泉とともに発展してきました。昭和30年代に入ると合成樹脂や化学塗料の新素材が導入され、安価で取扱いが簡便な実用品として新たな市場が開かれました。昭和40年には、山中町上原町と加賀市別所町に漆器団地が造成され、機能的な量産体制が確立されました。

一方、今からおよそ340年前の明暦年間に始まったとされる九谷焼は、およそ50年間でいったん途絶えたものの、江戸時代末期に大聖寺の豪商豊田伝右

衛門により吉田屋窯として再興されました。近世の古九谷、吉田屋窯、宮本窯、松山窯等の九谷諸窯は、九谷焼の基本的な伝統様式を生み出し、その技法は明治以降の当地における九谷焼製造へと受け継がれています。

現在の加賀九谷陶磁器協同組合は、明治15年に旧大聖寺藩士飛鳥井清を会長に発足した「江沼郡九谷陶画工同盟会」が前身となっていますが、明治の終わりごろより、実力ある陶工たちの独立気運が高まり、個人主体の時代へと移り変わっていきました。現在、市内には、おおよそ36軒の窯元が存在し、それぞれ手づくりにより一品生産により、質の高い製品をつくっています。

農業の概要

本市の農業は、水田が3,160ha、樹園地を含む畑が368haを占めており、圧倒的に水田が多いのが特徴です。水田では、コシヒカリを中心に水稻を栽培し、水田の生産調整では、大豆・大麦をはじめ、ブロッコリー・カボチャが栽培され、果樹園では、梨やブドウなどの栽培が盛んにおこなわれています。特に、ブロッコリーは、北陸で最大規模の64haの作付面積をほこり、また、果樹の梨では、県内一番の栽培面積72.3haを確保しています。

加賀市の農業経営形態は、地形、地質等から大きく3つに区分されます。

中央の平坦部は昭和40年頃からの土地改良事業により、大型圃場(30a以上の区画整備率98%)に整備され、近代的な稲作経営地帯を形成し水稻、大豆の他にブロッコリー、カボチャ等の野菜が栽培されています。

一方、柴山町など海岸に近い丘陵部では、地質の関係から早くからトマトを中心とした、ビニールハウスでの施設野菜がさかんで水稻との複合経営がおこなわれています。また、奥谷、小塩辻、高尾では梨が、豊町ではブドウを中心とした果樹栽培が盛んです。近年においては、石川県の推奨作物である葡萄「ルビーロマン」の栽培拡大も行なわれています。

山間部の農業経営形態は、中央の平坦部の延長線上にあります。猪被害等の山間地特有の厳しい状況が見られます。

農業を取り巻く状況は、農業者の減少や高齢化・後継者不足、農業生産物価格の下落・低迷、生産資材の高騰、野菜・果樹等の産地間競争の激化等厳しさが一段と増えています。こういった農業を取り巻く状況の変化や今後の農業・食糧情勢に的確に対応するため、観光農園として一年中果樹のもぎ取り体験が出来る「フルーツランド」や都市と農村の交流施設として、「竹の浦館」「山

ぼうし」など、農業者のみならず、消費者、行政などが一体となった取り組みが行われています。

3 温泉と大聖寺

市内には、約1300年前に僧「行基」が発見したと伝えられ、古い歴史をもつ山中温泉や、多くの文人や芸術家が訪れた山代温泉、明治以降に温泉街が形成され、比較的新しい片山津温泉の3温泉があります。温泉観光都市として、年間3温泉で合計およそ200万人の宿泊客が訪れています。

一方、江戸時代から、大聖寺は当地域の行政、経済、福祉の中心地でした。藩政時代には錦城山の麓、現在の錦城小学校建物の場所に藩邸屋敷が設けられ、明治以降も織物業や機械産業で栄え、郡役所や市民病院など公共施設の多くが大聖寺に集まっていました。ところが、北陸本線の作見駅が加賀温泉駅として加賀市の中心的な鉄道駅として整備されたことや産業構造の変化などにより織物業が衰退したことで、大聖寺駅や既存商店街もいっきに衰退しました。

しかしながら、大聖寺には、藩政時代の面影を残す貴重な文化遺産が数多く存在しています。特に、江沼神社の長流亭は、大聖寺藩三代目藩主前田利直の御休み処としてつくられたもので、現在、国の重要文化財に指定されています。また、兼六園とともに県内では数少ない回遊式大名庭園や近年、復元整備された「殿様河道」と呼ばれる船着場などもあり、江沼神社から錦城山周辺は大聖寺藩十万石文化が集積したシンボルゾーンとなっています。また、山ノ下寺院群にも、大聖寺藩成立前後に創立された7つの寺院と1神社が並んで立地しており、「歴史文化の町」としての大聖寺の価値や重要性は増しています。